

魚類防疫に関する技術指導と研究

(魚介類安全対策事業)

石原成嗣・松本洋典・岡本 満・清川智之

1. 研究目的

海面及び内水面の魚病被害軽減と魚病のまん延防止のため、魚病検査や水産用医薬品の適正使用の指導及び養魚指導・相談を行なう。

2. 研究方法

種苗生産、中間育成、養殖場等の生産施設を巡回し、疾病の対処法や飼育方法の指導・助言を行うとともに、各生産施設や天然水域における疾病発生時には現地調査、魚病検査により診断を行った。検査方法は、主に外観および解剖による肉眼観察、検鏡観察、細菌分離、PCR 検査等により行った。細菌が分離された場合は、対処法および水産用医薬品の適正使用について指導を行った。

モニタリング調査として、ヒラメのクドア属粘液胞子虫症 (*Kudoa septempunctata*)、コイヘルペスウイルス (KHV) 病について、農林水産省ガイドラインおよび水産庁が作成した防止対策等に従って定期的な保菌検査を実施した。また、ヒラメのシュードモナス症について、本県では度々中間育成施設で被害が発生していることから、定量 PCR による保菌検査を行った。その他、種苗生産施設等からの依頼に応じた保菌検査も行った。

なお、アユの冷水病に関しては「アユ冷水病対策事業」に記載した。

3. 研究結果

(1) 疾病発生状況

今年度の魚病診断件数は、海面 1 件、内水面 8 件の計 9 件であった。概要は以下の通りである。

松江市の個人業者が畜養していたクロアワビのへい死が発生し、原因を特定することは出来なかったが、濾過装置が不調であったことから、飼育水の水質悪化による衰弱が疑われた。

出雲地域と石見地域の個人池でそれぞれ一件

ずつ、ニシキゴイの魚病診断依頼があった。KHV 病の PCR 検査の結果は陰性で、原因を特定することは出来なかったが、それぞれ酸欠とアルゲルス症が疑われた。

出雲地域の養殖業者よりヤマメの魚病診断依頼があった。冷水病の PCR 検査の結果は陽性であり、ビブリオ病との混合感染も疑われた。また石見地域の養殖業者からもヤマメの魚病診断依頼があったが、こちらは原因を特定することは出来なかった。

宍道湖自然館ゴビウスよりアユの魚病診断依頼があり、検査の結果細菌性腎臓病と診断した。ゴビウスからは他にザリガニ等甲殻類に対する診断依頼が 2 件あったが、原因を特定することは出来なかった。

石見地域の養殖業者よりアマゴの魚病診断依頼があり、イクチオボドと細菌の混合感染と診断した。

(2) モニタリング調査

海面では、ヒラメのクドア症について県内の種苗生産、各中間育成施設のヒラメ計 165 検体の PCR 検査を行ったが、全ての検体で陰性であった。ヒラメのシュードモナス症について各中間育成施設のヒラメ計 20 検体を検査したが、全ての検体で陰性であり、シュードモナス症と考えられる目立った斃死も発生しなかった。また、隠岐地区の種苗生産施設からの検査依頼に対応し、ヒラメ種苗のシュードモナス症の保菌検査を計 20 件体に対して行ったが、全て陰性であった。

内水面では、KHV 病について、コイ養殖業者を対象とした定期検査を 6 月と 11 月に行ったが、いずれも陰性だった。

疾病発生・診断状況の詳細については添付資料に詳細を記載した。